

【研究ノート】続・長崎県本土部の地域集団の存在と動向

—弥生時代中期から古墳時代を中心に—

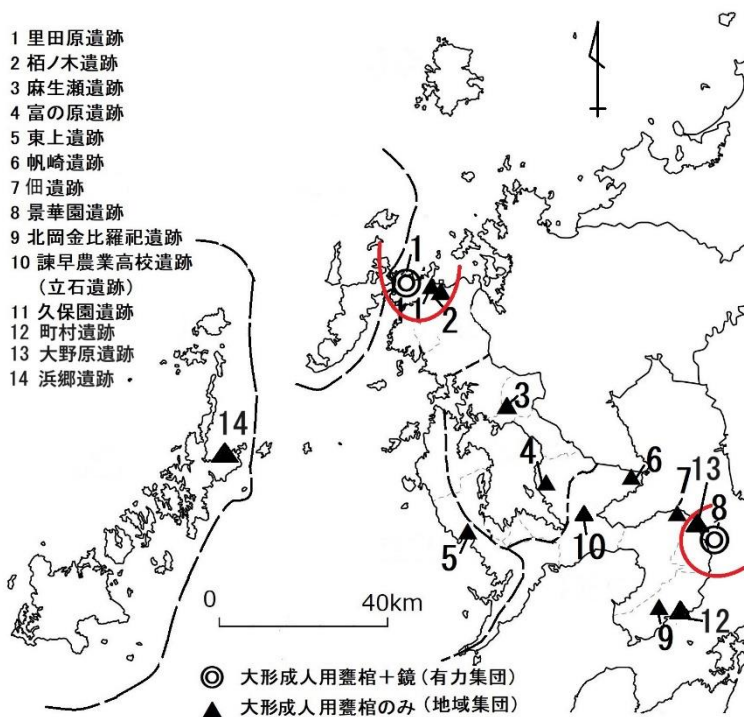
古門 雅高

はじめに

本稿は筆者が2023（令和5）年11月にweb上で公開した「長崎県本土部の地域集団の存在と動向」（古門2023b）の続編である。前稿では地域集団の存在を示す遺構や遺物の分布をもとに弥生時代中期から古墳時代後期までの長崎県本土部の地域集団の存在と動向の可視化を試みた。このような試みは、これまで本県本土部ではなかったことであり、それ自体は有意義であった。しかしながら各時代の地域集団の分布の比較検討が十分ではないという課題が残った。具体的にはソノキ（旧彼杵郡）とマツラ（旧松浦郡西部）では当該期を通じて地域集団の分布に大きな変化がなかったものの、タカク（旧高来郡）では古墳時代前期から中期にかけての地域集団の分布が、その前後の時期と比べて大きく異なっていた。にもかかわらず前稿ではこの両地域の比較検討が十分ではなかったため、本稿ではそれらの対比を行い、あらためて当該期の長崎県本土部の政治社会状況を考察した。

1 地域集団抽出の方法

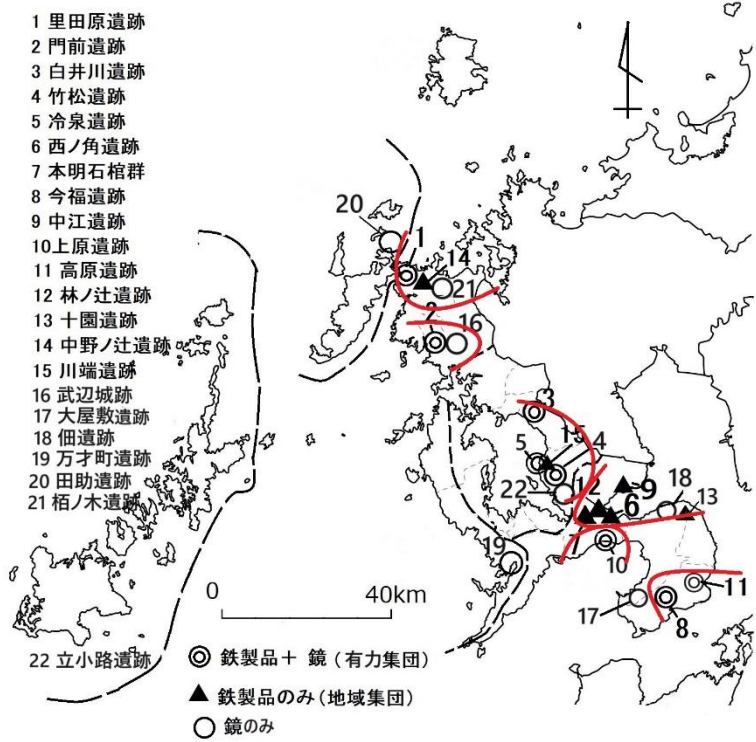
ここでは前稿で示した地域集団を抽出する方法を簡潔に再掲する。地域集団の認定にあたっては、集落の変遷や威信財の保有状況および墳墓の在り方などを総合的に勘案して認定すべきであるが、考古資料に恵まれない本県本土部ではそれにもかかわらず、同集団の存在を示唆すると思われる遺構な



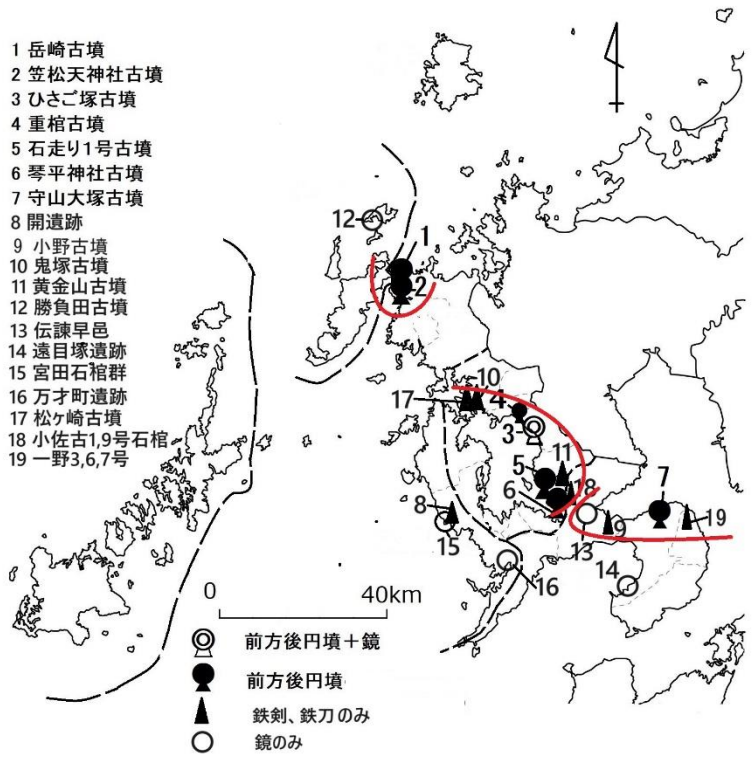
第1図 弥生時代中期の地域集団

いし遺物と鏡の分布から地域集団の存在を想定した、いわば見かけの地域集団である。地域集団の数においても同一系譜の集団が長期間存続した場合、同集団の指標となる遺構や遺物を複数遺すことが想定されるため、これもまた見かけの数である。

次に筆者が地域集団の存在の決め手として選定した指標について述べる。鏡は全時代において地域集団の存在を示す指標とした。時代別の指標として弥生



第2図 弥生時代後期から古墳時代初頭の地域集団



第3図 古墳時代前期から同中期の地域集団

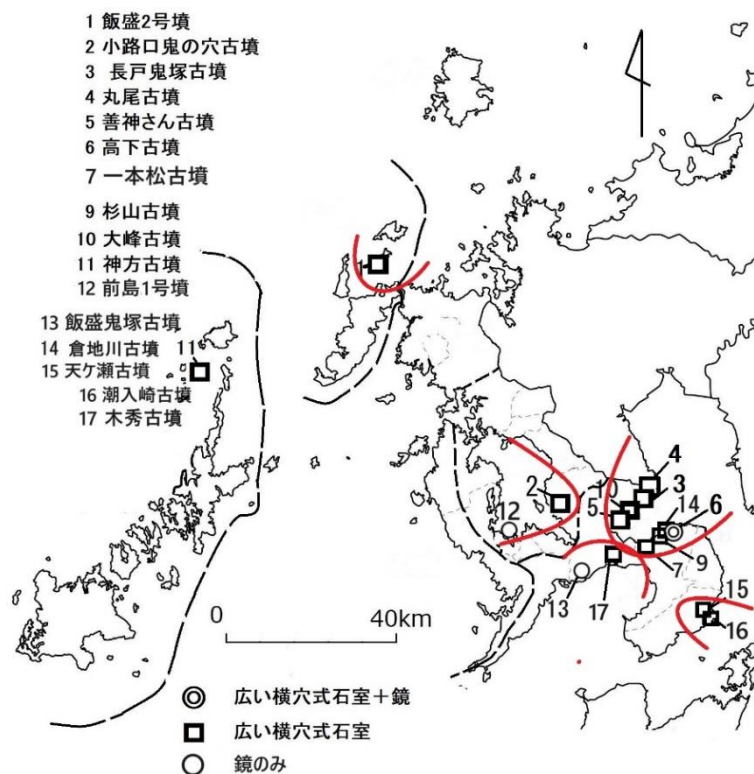
時代中期では、北部九州系の大形成人用甕棺墓の存在を指標とし、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては遺構から出土した鉄製品の有無を指標とした。

続く古墳時代前期から中期にかけては前方後円墳と遺構出土の刀剣を指標とし、古墳時代後期では横穴式石室の玄室の床面積を指標とした。さらに抽出した地域集団の中で、鏡と指標となる遺構遺物を併せ持つ集団を有力集団とし、他の地域集団との差別化を図った。

2 長崎県本土部の地域集団の存在と動向

第1～4図は前稿(古門前掲)で示した地域集団の時代別の分布図を時系列で並べたものである。朱書きのラインは有力集団を含む地域集団の集中範囲を示す。一見して分かることは第3図で示した古墳時代前期・中期のタカクの地域集団の分布が、その前後の時期とは異なることである。前代のタカクの地域集団の分布を示した第2図と比較した場合、有明海沿岸地域の北部(旧北高来郡)および島原湾沿岸の地域集団、さらには橘湾北岸の集団が姿を消しており、見かけ上は地域集団が有明海沿岸地域の南部にのみ存在した状況である。

一方、マツラヤソノキは



第4図 古墳時代後期の地域集団

地域集団の数こそ異なるものの、その分布状況に大きな変化はない。そのことがタカクに地域集団が希薄な状況を一層際立たせている。当時のタカクに有明海沿岸地域の南部にしか地域集団の存在が見られないことは、4、5世紀の当地に大きな政治的、社会的な変化が生じたことを示していると言わざるをえない。

一方で第4図の古墳時代後期に目を転じると、タカクの有明海沿岸地域北部や島原湾沿岸および橘湾北部で地域集団が再び出現している。このことは、弥生時代後期から続く地域集団が古墳時代に入って消滅したので

はなく、その間雌伏して、その後復権したのか、あるいは新たな地域集団が誕生したかのいずれかであったと想定される。いずれにせよ古墳時代後期のタカクも前期、中期と同様に前代とは異なる政治、社会状況にあったことが想像される。

3 ソノキに見る長崎県本土部の古墳時代前期から中期の社会階層

ここでは当地の古墳時代前期から中期の地域集団の有力者がどのような社会階層に位置付けられるかを検討する。考古資料が多いソノキの墓制研究の成果を見る限り、当地の4、5世紀の社会階層の最上位は前方後円墳被葬者で、地域の最有力者と考えられる。次に円墳で内部主体が石棺系横口式石室、石棺系石室さらに初期横穴式石室の被葬者が中位の地域有力者と見られる。そして最下位が箱式石棺被葬者であると想定されるのである（福田1994、宇野2018、古門2024）。

4 各地の4、5世紀の前方後円墳と鏡

次に地域の最有力者の動向を見るため、彼らが埋葬された前方後円墳の消滅時期または中断時期を検討する。この場合、3世紀の後半から出現する首長墓の系譜を引く前方後円墳に限定し、古墳時代後期の群集墳出現後の前方後円墳は除外する。

マツラの前方向後円墳は笠松天神社古墳と岳崎古墳が挙げられる（第5図）。筆者は前者を前方後円墳集成編年の3期に、後者を同4期に編年しており（古門2022）、当地では6世紀以降の前方後円墳の存在が知られていないため、マツラの前方向後円墳はこの2基のみとなる。したがってマツラでは遅くとも5世紀の前葉には前方後円墳が姿を消すようである。

前方後円墳 集成編年	地域・ ／年代	土器様式 (古門2022)	マツラ	ソノキ	タカク
1期	250	第Ⅰ期			
2期	300	第Ⅱ期			☪ 守山大塚古墳
3期		第Ⅲ期	☪ 笠松天神社古墳		
4期		第Ⅳ期	☪ 岳崎古墳	☪ 琴平神社古墳	
5期	400	第Ⅴ期		☪ ひさご塚古墳	
6期					
7期					
8期	500	第Ⅵ期			

☪ フレ権現古墳

☪ 重棺古墳

☪ 石走古墳

第5図 長崎県本土部の前方後円墳編年（古門2022）

一方ソノキの前方後円墳のうち琴平神社古墳を前方後円墳集成編年の4期に、ひさご塚古墳を同編年の5期にそれぞれ編年した（古門前掲）。石走（いしばしり）1号墳と重棺（かさんがん）古墳などは、ひさご塚古墳に後続すると考えられているが、ともに5世紀後半におさまるものとする（宮崎 2019）。後続する明確な前方後円墳はないため、ソノキでは5世紀後半のある時点で前方後円墳が姿を消すようである。

かたやタカクでは当該期の確実な前方後円墳が守山大塚古墳のみで（註1）、当地では6世紀後半に倉地川古墳が出現するまで前方後円墳造営の長い中断期間がある。

以上の3地域の前方後円墳の有り方を見ると、マツラでは5世紀前葉から、タカクでは4世紀中葉から、ソノキでは6世紀から前方後円墳が消滅ないし中断していることが分かる。ということは地域の最有力者が5世紀を通して存在したのはソノキのみで、マツラやタカクは早々に社会階層上位の地域有力者が姿を消している。このことは最上位の地域有力者が居なくなったか、存在したものの倭王権との連帯を象徴する前方後円墳の採用が許されなかったことが考えられる。

5 石棺系横口式石室と石棺系石室などの分布

続いて社会階層中位の地域有力者の動向を検討するために彼らが埋葬された石棺系横口式石室と石棺系石室などを見ていく。第6図は当該期の本県本土部の中期古墳編年であるが、一見して5世

時期	前方後円墳 集成編年	須恵器編年	地域区分		
			マツラ	ソノキ	タカク
中期	4期				
	5期	TG232		黄金山古墳 ひさご塚古墳 佐世保鬼塚古墳	
	6期	TK73			
	7期	TK216 (ON46) TK208		前島6号墳 同7号墳	一野5号墳
	8期	TK23 TK47			一野1号墳 同3号墳 曲崎10号墳
後期	9期	MT15 TK10			小野古墳

第6図 長崎県本土部の石棺系横口式石室、石棺系石室、初期横穴式石室の編年（古門 2024 一部改変）

紀前半のタカクにそれらの墳墓が存在しないことが分かる（註 2）。このことは前述の前方後円墳被葬者と同様に社会階層中位の地域有力者が存在しなかったか、存在しても当時の社会的地位に見合った墳墓を造れなかったか、いずれかの可能性があると考えられる。

6 外部勢力による西九州沿岸外洋ルートの開発と整備

次に古墳時代前期および中期に地域の有力集団の存在が希薄であったタカクについて考察する。同地域は4世紀中葉の段階で地域の最有力者（前方後円墳被葬者）がいなくなり、地域集団も見かけ上は有明海沿岸の南部にしか存在しないように見えた（第3図）。このような状況を検討する際に前述の埋葬施設の動向と共に参考となるのが鏡の分布である。第3図に見るように、古墳時代前期と中期のタカクとスカ（ソノキのうちの角力灘（五島灘）沿岸地域）に鏡が集中することが見て取れる。海域で示すと橘湾沿岸と角力灘（五島灘）沿岸に分布する。

具体的には長崎市の宮田 A-1 号石棺の珠文鏡、同市万才町遺跡の（斜縁）四獣鏡、雲仙市の遠目塚石棺の内行花文鏡、伝諫早邑の四獣鏡である（古門 2023a）。これらの鏡が副葬品として出土した場合は箱式石棺からであり、万才町遺跡のそれも箱式石棺である可能性が高い。したがって鏡の下賜をうけたのは社会階層上位の地域有力者ではなく、佐世保鬼塚古墳を除いて中位の階層でもなく、階層下位の地域有力者であったことが窺える。

前述したようにタカクには古墳時代前期、同中期前半には上位の有力者および中位の有力者は有明海沿岸地域南部の地域集団以外は存在しない。そのような中で、なぜ当地の社会階層下位の地域有力者に鏡が与えられたのであろうか。

古墳時代の鏡は有力な首長が独占的に入手し、配下の有力者に下賜したとされる。ここからは筆者の仮説であるが、当該期のタカクには鏡の分配に関わるような前方後円墳被葬者や有力な地域集団の存在が有明海沿岸地域南部の地域集団しか認められない。したがって鏡の配布者はおのずとこの有明海沿岸南部地域の集団の有力者か、外部勢力に求めざるを得ない。しかし前者が実際は伝諫

早邑出土鏡以外の鏡を保有していないところから見て（古門 2023a）、筆者は鏡の分配者は外部勢力の可能性が高いと判断する。このことは前述した埋葬施設の動向からも補強できる。すなわちタカクでは前方後円墳は早々に築造されないか、あるいはできない状況であり、社会階層中位の有力者も 5 世紀前半までは地位に見合った墳墓が造れていないようである。

以上のようなタカクの墳墓の様相や鏡の分布の在り方から判断して、当時の有明海沿岸南部地域の集団は外部勢力と協力関係にありながらも、その強い影響下にあったのではないかと推測する。

7 タカクに政治的社会的影響を及ぼした外部勢力について

では、古墳時代の前期後半から中期にかけてタカクと協力関係にあり、強い政治的影響力を及ぼした外部勢力とは一体どこの誰であろうか、当該期において鏡の分与に関わることができるタカク近隣の政治勢力としては、火の君（肥君）と筑紫の君、さらに倭王権が挙げられる。現状ではそのいずれが外部勢力に該当するのか断定できない。ただし、タカクと隣接するソノキの地域集団が前代のまま存続しているところから見て、外部勢力の影響はタカクに留まり、タカク以外に版図を広げることはなかったと考える。

8 古墳時代後期のタカクの地域集団について

前述のようにタカクでは古墳時代後期になると再び地域集団が出現する。このことは同前期・中期に当地に影響を及ぼした外部勢力が、何らかの理由で当地への影響力を弱めたか、その影響力を喪失したことによるものと考えられる。このような大きな政治・社会の画期を同時代に求めるならば、筑紫君磐井の乱（527 年）がまず思い浮かぶ。そうすると、乱後にあたかも当地の地域集団が復活したような状況から判断して、乱の勝者で、その後地方支配を強化した倭王権が前述の外部勢力であった可能性は低いと言えよう。したがって、古墳時代前期、中期にタカクに影響を及ぼした外部勢力は火の君か筑紫の君のいずれか、ないしはその両者と考えた方が合理的であろう。

9 外部勢力がタカクに政治的影響力を及ぼした目的

次に外部勢力がタカクに政治的影響力を及ぼした目的を考察すると、鏡が分布する地域が西九州外洋航海ルート上にあることに注目したい。外部勢力にとって当時の朝鮮半島における高句麗の脅威に対抗するための半島への軍事進出にあたり、兵站となる同ルートの開発整備が喫緊の課題であったと想像される。ゆえに、食料や水、装備などの供給や補填、修理に必要な外洋航海ルート上の中継地を確保し、整備・管理するため、社会階層下位でありながらも、中継地の有力者であった彼らとの良好な関係を取り結ぶために鏡を下賜したと考えるのである（古門前掲）。

10 まとめ

以上のように筆者は本稿において、4, 5 世紀の本県本土部の地域集団の動向を見る限り、当該期のタカクの地域は外部勢力と協力関係にあり、かつその強い政治的影響下にあったという仮説を提起した。さらにその外部勢力は火の君か、筑紫の君のいずれか、ないし両方との仮説を示した。

また外部勢力の目的は高句麗と争う朝鮮半島の戦局を有利に展開するための兵站の確保であり、外洋航海ルートの開発、整備であったと推測した。仮説の検証にあたっては、同地域の考古学的成果のさらなる検討が必要になってくる。例えば雲仙市龍王遺跡で検出された古墳時代前期前葉の豪族居館の分析検討などが必要であろう。後日を期したい。

本稿を執筆するにあたり野澤哲朗・宮崎貴夫・渡邊康行の各氏には、お世話になった。芳名を記し感謝申し上げる。

【註】

- 註1 筆者は同古墳を前方後円墳集成編年2期に編年している（古門2022）
- 註2 マツラも石棺系横口式石室や石棺系石室などが分布しないが、同地域は肥前東部（佐賀県）との関連も視野に入れて検討しなければならないので、今後の課題としたい。

【引用・参考文献】

- 宇野慎敏 2018 「肥前西部における横穴式石室の展開とその背景—彼杵郡の軍事集団の出現について—」『西海考古』第10号 西海考古同人会
- 福田一志 1994 「IVまとめ」『前島古墳群Ⅱ』時津町文化財調査報告書第2集 時津町教育委員会
- 古門雅高 2022 「前方後円墳分布周縁地域の社会—長崎県本土部の古墳時代前期および中期を中心に—」『西海考古』第12号 西海考古同人会
- 古門雅高 2023 a 「【研究ノート】「西海の鏡」
<https://saikaikouko.jp/manpitusakuhin/kagami.pdf>
- 古門雅高 2023 b 「【研究ノート】長崎県本土部の地域集団の存在と動向—弥生時代中期から古墳時代を中心に—」
<https://saikaikouko.jp/manpitusakuhin/chiikisyudan.pdf>
- 古門雅高 2024 「【研究ノート】肥前西部の中期古墳」
<https://saikaikouko.jp/manpitusakuhin/tyukikohun.pdf>
- 宮崎貴夫 2019 「日本列島最西端の古墳の様相—長崎県本土地域における古墳の諸問題」『長崎地域の考古学研究』
自費出版

令和6年6月1日（土） 脱稿

2024（令和6）年6月6日 第1図、第3図差し替え